

東京オリンピック・パラリンピックに向けて ー7年後の日本のあるべき姿ー

須田正明

オリンピック・パラリンピックの東京開催が決まり、日本人全体が自信と誇りを取り戻しつつあり、経済は確実に上昇機運にある。この状況は、我々日本人に、余裕を持った冷静で堅実な思考ができる環境と、さまざまな良いアイデアを実現しやすい環境を作り出している。日本にとって好ましい状況になってきているが、状況は変化するものであるから、この絶好の状況が無駄にすることなく、前向きに積極的に利用しなければならない。私は、日本の一地方でも、世界に通用する地域活性化や実りある教育福祉活動のモデルを提供することは可能であると考えて一つの提案を試みる。

テーマになっている「7年後の日本のあるべき姿」の一つとして、私はオリンピック・パラリンピックで来日した人だけでなく、日本を訪れた人すべてが、日本人の心配りの細やかさや隣人愛の深さ、そして行動の基本になっている高い倫理観に触れて、「やはり日本は高潔で素晴らしい国だ。来てよかった」という感動を味わってもらえるような地方の姿を思い描いている。日本中どこへ行ってもその感動を味わってもらうため、その姿を構築する手段として、主に福祉・地域の教育力の充実・地域活性化を目的とした、「クローバーシステム」(クローバーとはクローバリーフ、もちろん四つ葉のクローバーのことである)を各自治体で構築することを提唱する。

私が提唱する「クローバーシステム」とは次のようなものである。

まず、4枚の葉の意味であるが、それはシステムを構築する「産(企業)」「官(行政)」「学(幼稚園・小・中・学校・高等学校・大学)」「地(地域=地域の子供会・老人会・氏子会・各種体育団体・地域の伝統芸能や伝統技能の保存会・婦人会・消防団・寺の檀家集団)」の四者である。もう一点加えるなら、4枚の葉は、

1. 年齢や仕事や立場の違いを超えての、お互いの「わかり合い」。
2. 子供から高齢者まで、より多くの生きがいの「見つけ合い」。
3. 異なる年代間で、それぞれの年代が持っている知識や知恵や技能の「学び合い」。
4. 上述の、1から3で育まれた人と人との「つながり合い」

という四つの目標も意味している。

四つ葉、すなわち「産」「官」「学」「地」は、具体的にどういうメンバーが、どんなことについて、どのように協力し合って地域における福祉の向上・地域の教育力の充実・地域活性の体制作りに取り組んでいくのかを述べる。

まず四者のメンバーであるが、以下のように選ぶ。「産」のメンバーは、地域に展開している各企業の総務部と若手社員から各1人、「官」のメンバーは、役所の環境部や産業観光の担当部、保健福祉の担当部から各1人、「学」のメンバーは、小学校と中学校・高等学校・大学から各3人、「地」のメンバーは子供会・老人会・氏子会・各種体育団体・地域の伝統

芸能や技能保存会・婦人会・消防団・寺の檀家集団から各2人、障害者福祉施設から1人（車椅子が必要な人を押す人を加える）をそれぞれ選ぶ。理由は、子供の視点、高齢者の視点、伝統を大切にしている人の視点、女性の視点、世の変化を見続けてきた高齢者の視点、障害を持った人の視点など、見る角度や思考の幅は広い方が良いし、違う年代や違う立場の人たちの相互理解にも役立つからである。この総勢36人ほどが基本的に月に1回会議を持つ。地域の行事や自然災害に対する準備や対策等で時期的なものも多いからである。

まず福祉の面から考察する。中心になるのは次代を担う「学」のメンバーである。

文化施設・体育施設・病院・駅舎・停留所・ショッピングモール・映画館などの娯楽施設・バスや電車などの交通機関・道路・歩道橋、河川や湖沼等の景勝地などについて、高齢者や目の不自由な人、あるいは車椅子を利用している人や障害を持った人を介助している人たちにとって、不便・不利・危険はないかの観点から、しっかり検証・調査を行う。現状に慣れっこの傾向は大人のほうが強いので、年若い児童生徒のほうが問題点を素直に見つけやすいからである。「学」のメンバーは、チェックした一つ一つの項目について、不便さや危険の排除についてだけでなく、どうしたらより快適で安全な状態になるか、ということについてもじっくり対策を考えて、考えついた見直し策・解決策を順次「クローバーシステム会議」に上げていく。そこで「産」「官」「地」のメンバーと共に、より有効で実行可能な見直し方法や解決方法・実施方法を見出していく。

二つ目は、地域の教育力の充実という面から考える。「地域の教育力」というのは教科の成績を上げる力ではない。先祖代々受け継がれてきた郷土の歴史や芸能・技能の理解と温かい人間関係の保ち方や健康法など、先人が守り受け継いで、生活の中に根付かせてきた知識や知恵に対する理解を深める力である。この分野では、地域の老人会や郷土の伝統芸能・技能を伝えている人たちの知識や知恵が大きな力になる。児童生徒が地域の高齢者から教えられ、伝えられ、学ぶという面が大きいからである。具体的には次のようなことが考えられる。

1. 正月・結婚式・法要等の郷土独自の作法、そこで出された郷土料理の作り方、あるいは薬用の草木や動物類の知識を年配者からしっかり聞き取って学び、詳細に記録する。
2. 町並みの変遷を知るため、一世代約30年ごとの、街の歴史地図を、出来るだけ多くの年配者の記憶を集めて作成する。これは、高齢者同士または高齢者と若者の話題の種になり、郷土の昔を知ることにもなり、話を盛り上げることにもなる貴重な資料である。
3. 防災の面からも、昔の地勢、川のくせや土壌の特徴など、古くからその地に住んでいないと分からないことを詳細に記録する。こういうことは年配者しか分からないから、年配の方々にどんどん発言してもらおう。これは防災面から考えても、いざというときに有効な情報になるので特に正確を期して詳細に記録する。
4. 地域に生息する希少動植物の調査。その保護・保存手段の研究。いったん消えたように見えても、現在は少しずつ復活してきている動植物もあるので、土日や長期休暇な

どを利用しての現地調査も必要である。これは各地域の環境浄化・環境美化に対する努力の成果も検証できる大切な取り組みである。

5. 地域の伝統的な民芸品で、現代では少なくなった、もしくはなくなったものについて、年配者の協力を得て探索・調査を行う。また、伝統的な子供の遊びや遊び道具についても同様に年配者の指導・協力を得て調査する。現在なくなっているものについては発掘する覚悟も要る。昔の遊び道具などは、文化的にも大きな価値を有すると考えられるので、収集の努力もする。この領域においては年配者の指導・協力は不可欠である。お年寄りをどんどん前面に出して、その蓄積された知識・知恵に若者が頼ることにより、お年寄りに自信や生きがいをより強く持ってもらうことも大きな目的であり、大きな効果が期待できる。

三つ目は地域の活性化についてである。

主として、過疎という問題を抱える地域を念頭において考察する。若者がいなくなり、高齢者ばかりで、やがて限界集落になっていく地域は、思い切った発想でないと、効果が期待できない。

深刻な過疎に悩む地域は、住人のいなくなった廃屋とそれに付随している田畑や山林を多く抱えている。堅牢な昔建築の廃屋を、宿泊施設や合宿所や研修施設、あるいはレストラン等にリメイクして利用することは良くあるが、確実な人口増加や安定した税収を望めるわけではない。私は、廃屋や田畑の利用法について発想の転換が必要であると考え一つの方法を提案する。

たくさんの田畑付き廃屋を、①子供が3人以上いて田舎に住みたいという強い希望がある、②米や野菜を作って生活したいという強い意志がある、③遠方の自治体に住んでいる、という3つの条件を満たす家族に無料で与える。遠方の都市部に住む家族に狙いを定めて募集をかければ、多くの応募があるであろうから、厳しい面接を行って、堅実な家族を選ぶことができる。選ばれた家族に田畑付き廃屋を無料で与え、最低10年間は税を免除する。その10年間に、荒れた田畑を耕作し、米や野菜その他自分独自で考えた作物の栽培で採算が取れて納税できるようしっかり取り組んでもらえばよい。厳しい面接で、信頼できる多くの家族が確保できるから地域の人口が増える。農業の好きな子供も増えるだろう。人口増加によって必然的に税収も増える。遠方から来た人たちであるから、それぞれが育った土地の名物料理などと地元の料理のコラボで新しい郷土の名物料理が生まれる可能性も大きい。この分野は施設整備や技術の支援、地勢・土壌・気候のデータ提供や土壌に合った作物の指導などで「産」「官」の力が必要になる。

クローバーシステムが機能すれば、始めに述べた四つ葉の意味する目的、即ち異なる年代間の「わかり合い」「教え合い」「つなぎ合い」「生き甲斐見つけ合い」が達成される。対外的には、地域を訪れてくれた外国の人たちにも、「生き生き生活のモデル」として、上述した地域の姿は、自信を持って見てもらえるものになるだろう。